世界に羽ばたけ！　米山学友⑱

# 人の役に立てる幸せ

愛育病院で妊婦の検診を行う湯暁暉さん

## 初めて見た出産の感動がきっかけに

湯さんが産婦人科医を志したのは、中国白求恩（ベクチューン）医科大学（現・吉林大学白求恩医学院）での臨床実習がきっかけでした。初めて出産に立ち会い、新しい生命の誕生に心から感動したからです。

日本とのかかわりは、大学入学のときから。湯さんの故郷、吉林省を含む中国東北部は日本との縁が深く、進学した同大学にも日本語医学クラスがありました。日本語の勉強にも魅力を感じ、入学。中国の医学部は通常５年制のところ、このクラスは６年制で、最初の１年間は日本語の集中講義、それ以降は医学の授業の一部が日本語で行われました。

日本語の勉強を始めてから、日本のことに接しない日はなく、自然と関心は大きくなっていきました。それは、いつしか日本留学の夢につながりました。

進学した大連医科大学修士課程の在学中、日本語スピーチコンテストに挑戦。結果は惜しくも３位でしたが、準備を通じて知り合った日本人の先生が保証人を引き受けてくれ、日本留学の道が開けました。指導を仰ぎたいと連絡を取った東京大学の教授からの勧めもあり、1997年９月、湯さんは私費留学生として来日しました。

## ロータリーとの交流で学んだ幸せの価値観

来日後、東京大学博士課程の試験に合格。学部在学中すでに日本語能力試験１級に合格していたため、留学生活に言葉の不安はありませんでしたが、それまでに経験したことのない経済的な不安が付いて回りました。

毎日夕方から５時間、中国料理店でのアルバイトに時間を取られ、研究が進まず焦る日々。奨学金はいずれも狭き門で、合格通知は得られませんでした。留学生の間で特に人気の高い米山記念奨学金に合格したときは、喜びと感謝の気持ちで胸がいっぱいになったそうです。

米山奨学生として、世話クラブの東京あすかロータリークラブの例会に出席し、さまざまな職業の会員と交流することは、単調な研究生活の中、非常に楽しいひとときでした。また、会員との交流の中で、「幸せとは何か、についてよく考えるようになった」と言います。経済的な余裕からだけでなく、世話クラブの会員は皆、精神的に充実し幸せそうに見えました。それは、仕事や奉仕活動を通じて、誰かの役に立っている実感があるからではないか、湯さんはそう感じました。

「人の役に立つことが幸せ」。現在の仕事を通じて日々感じている幸せの価値観に、最初に気付かせてくれたのが、ロータリーとの交流でした。

## 学位を取得して臨床医に

奨学金のおかげで、ようやく研究に打ち込めるようになったものの、研究は苦労の連続で、土日も研究室で過ごし、医学の文献を読みあさりました。その結果、湯さんの論文はアメリカの有名な雑誌に掲載され、日本産婦人科学会で発表の折には高得点演題にも選ばれました。

その間、人生における大きな出来事がありました。すでに結婚していた湯さんが第１子を妊娠、出産したのです。夫婦にとっては大きな幸せでしたが、「このことで奨学金が打ち切られるのではないか」という不安がよぎり、カウンセラーに報告すると、「安心しなさい」と、すべて取り計らってくれ、クラブの皆が温かく見守ってくれました。

東京都港区の愛育病院は、都の総合周産期母子医療センターに指定される中核的な産院の一つ。2006年には秋篠宮妃殿下が悠仁親王を出産したところです。この病院の産婦人科医師として、米山学友の湯暁暉（タンシャオホイ）さんは働いています。9歳と1歳の2人の子育てと、責任ある仕事との両立で多忙な毎日ですが、いつも明るい笑顔を絶やさない湯さんは、多くの患者とその家族から慕われ、信頼されています。

よねやまだより

出産後も休学せず、クラブの例会もほとんど休まずに出席し、2002年3月、目標通り最短の4年間で医学博士号を取得すると、湯さんは迷わず臨床医になる道を選択しました。中国と日本の医学部カリキュラムの違いから、日本の医師国家試験の受験資格を得るため、さらに2年を要しましたが、国家試験は一度で合格し、晴れて医師としての一歩を踏み出したのです。

## 人生の大切なステージに役立ちたい

湯さんが医師免許を得た04年は、新たな医師臨床研修制度が始まった年でした。幅広い診療能力を養成するため、2年間で7つの科を回る研修が義務づけられたのです。研修を終えた06年当時、労働環境の厳しい産婦人科医の状況は良いとは言えず、湯さんもこのまま進むべきか、自身に問い直しました。育児との両立で、険しい道ではありましたが、やはり「産婦人科以上にやりたい科はない」という気持ちに変化はありませんでした。

東京大学の産科婦人科教室に入局し、3年目に派遣されたのが東京都港区の愛育病院です。この病院では、子育てをしながら仕事を続ける医師への理解や支援も手厚く、湯さんも昨年4月に第2子をここで出産、職場や家族のサポートのもと、半年で職場復帰しました。

今年4月からフルタイム勤務の多忙な毎日ですが、「仕事をしているだけで幸せ。患者さんやご家族からの感謝の言葉にすべての疲れを忘れます」と。取り上げた赤ちゃんの母親から「先生の名前から『暉』の字を取って、名前を付けました」と、手紙をもらったこともあります。

「働ける限り、産婦人科医の仕事を続けていきたい。一人でも多くの女性の健康や、妊娠・出産といった人生の大切なステージに役立ちたいのです」

支えてくれる人たちへの感謝と、やりがいのある仕事ができる幸せをかみしめながら、湯さんは、今日も笑顔で診療にあたっています。

**プロフィール**

湯（タン） 暁暉（シャオホイ） さん

（2000 － 02／東京あすかＲＣ）
中国吉林省出身。1997年来日。東京大学大学院博士課程で生殖・発達・加齢医学を専攻、2002年に学位取得。04年医師免許取得。06年東京大学医学部産科婦人科教室に入局。同教室から派遣され、08年から総合母子保健センター愛育病院に勤務。医学博士。産婦人科専門医。

**ロータリー米山記念奨学会事務局**

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または“よねやまだより”についてのご意見を、(財)ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

TEL：03－3434－8681　FAX：03－3578－8281
Ｅメール：mail@rotary-yoneyama.or.jp

## 私が米山に寄付をする理由

大内会員（左から2人目）の家族（右端・トヨ子さん）と、米山学友のハイ君（左端）

仙台平成ロータリークラブ・大内博会員夫人のトヨ子さんは、第66回米山功労者メジャードナー。ロータリアンではありませんが、これまでに多額の寄付をしてくださっています。理由は、夫の博氏が青年期、奨学金の支えで進学、海外留学を果たしたこと。今の自分たちがあるのは奨学金制度のおかげという気持ちから、自身の貯金を寄付に充てています。生活は質素に、「宝石を買うより社会に還元したい」と、トヨ子さん。「米山奨学事業は、皆がお金を出し合って大きな奨学金となる。勉強は財産。どの国から来た留学生であれ、世界にたくさんある国の中から日本を選んで来日し、自国を離れて懸命に勉強する若者を応援したい」と語ります。